

サバラーンの生涯

清水, 宏祐
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/19798>

出版情報 : 史淵. 148, pp.67-102, 2011-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

サバラーンの生涯

清水宏祐

はじめに

イギリスのヴォスパー社 (Vosper Thorny Croft) は、高速魚雷艇の製造と輸出で知られている。この会社が最初に手がけたフリゲート (Frigate・ペルシア語ではナーウチェ (نلوچه)、^{ナウシェキヤン (ناوشکن)}) とするのは、駆逐艦の誤記) が、パフラヴィー朝 (シャーハンシャーヒーイエ・イーラーン1925 - 1979年) 時代のイランが発注したもの (型式 MK5) であった。イランは、豊富な石油収入を背景に、4隻のフリゲート購入を決め、同社に製造を依頼した。艦は1967年から1968年にかけて、次々に起工された。これらは『シャー・ナーメ شاهنامه』の主人公たちの名にちなんでサーム (سام)、ザール (زال)、ロスタム (رستم)、ファラーモルズ (فرامرز) と命名された。サームとファラーモルズは1968年、1969年にヴォスパー社の、ザールとロスタムは、ヴィッカーズ社 (Vickers) の船台で、それぞれ進水した。その後艤装工事を終えて、イラン海軍に引き渡され、就役したのは、1971年から1972年にかけてであった。これらのフリゲートは、ネームシップのサームにちなんで「サーム級」と呼ばれた。

イラン革命後の1985年、イラン・イラク戦争の最中に、この4隻は、イランの山の名をとって、名称が変更された。サームはアルヴァンド (الوند) に、ザールはエルボルズ (البرز) に、ロスタムはサバラーン (سبلان)、ファラーモルズはサハンド (سهند) と改名されたのである。これにともない、型式名も「アルヴァンド級」に改められた。

これらのフリゲートのうち、1隻は撃沈されたものの、他3隻は幸運にも生

き残り、現在でもなお、イラン海軍の中心兵力として活躍している。なかでもサバラーンは、ペルシア湾において、イラクの船舶およびイラクの物資輸送にあたる第三国の商船、タンカーを臨検し、あるいは攻撃にあたって、各国の商船・タンカーの恐怖と憎悪的となったとされる。サバラーンは、その後アメリカ空母エンタープライズ (CVIV 65 *Enterprise*) の艦載機による攻撃を受けつつ、辛くも生還するという、波乱に満ちた道筋をたどった艦であった。

本稿では、このサバラーンの生涯に焦点をあて、従来あまり省みられることのなかったイラン海軍 (ニールーイェ・ダルヤーイー نیروی دریایی) の活動と、アメリカ側の対応について述べてみたいと思う。

ロスタム (サバラーン) の建造

イラン海軍がサーム級・4隻のフリゲートを発注したのは、1967年のことであった。基本設計はヴォスパル社が担当したが、建造能力の関係もあって、ザール (エルボルズ) とロスタム (サバラーン) は、ヴィッカーズ社の船台で作られることになった。ロスタムは、ハイ・ウォーカー (High Walker) のヴィッカーズ社船台で、1967年10月10日に190号艦として起工され、引き続き同社のバロウ (Barrow) 船台にて1079号艦として工事が続けられた。進水は、1969年3月4日で、就役は、1972年5月26日のことであった。発注から、5年を要したことになる。

ちなみにザールは、バロウのヴィッカーズ社船台で1080号艦として、1968年3月3日に起工され、1969年3月4日に進水している。起工から進水まで1年である。ザールの就役は、1971年3月1日のことであった。

ヴォスパル社で作られたネームシップのサーム (アルヴァンド) は、ウールストン (Woolston) にて、1080号艦として1967年5月22日起工、1968年7月25日に進水、1971年5月20日に就役した。残る1艦、ファラーモルズ (サハンド) は、同じくウールストンのヴォスパル社にて1080号艦として1968年7月25日に起工、1969年7月30日に進水している。就役は1972年2月28日のことであった。(起工日、進水日、就役日には、『ジェーン海軍年鑑』と、LLCの一連の記録

サバラーンの生涯

とでは、若干の差がある。ここでは、『ジェーン海軍年鑑』の記録を採用している（『ジェーン海軍年鑑』、p.268, *Alvand Class Frigates*, pp.1 12, *Iranian Military*, pp.45 54, *Frigates of the Islamic Republic of Iran Navy*, pp.1 22）。

順調に起工、進水した同型艦の中で、複雑な過程をたどったロスタム（サバラーン）が、その後幸運に恵まれたのは、面白い。

ロスタム（サバラーン）の要目

ロスタム・後のサバラーンの要目について述べよう。

イラン海軍における艦番号は、ロスタム時代が DE 73 サバラーンと改名後は F 73となった。駆逐艦と誤記する例があるのは、このためであろう。

基準排水量は、1100トン、1988年段階では1220トン

満載排水量は、1540トン

全 長 94.5メートル（イランはメートル法を採用している）

全 幅 11.07メートル

喫 水 3.25メートル

推 進 2 軸

出 力 パックスマン・ヴェンチュラ・ディーゼル 3800馬力エンジン 2
基（巡航時）

ロールスロイス・オリンパス TM-3A ガスタービン 46000馬力
2 基（最大戦速）

速 度 17ノット（巡航速度）

39ノット（最大戦速）

航続距離 5000海里（15ノットにて）、3200海里（17ノットにて）

兵 員 125名 最大で146名

兵 装 主砲 11.4センチ（4.5インチ）単装砲（ヴィッカーズ 55口径
MK8）1 門

機銃 35ミリ連装（エリコン）2 基

ミサイル SSM (対艦) Sistel Sea Killer 連装1基
SAM (対空) Short Bross Sea Cat 3連装1基

レーダー Plessey AWS1

ソナー Graseby 174、Graseby 170

(兵装については、後述の米海軍による「カマキリ作戦」に応戦した時のものを採った。『ジェーン海軍年鑑』、p.268)

イラン海軍小史

簡単に、イランの海軍について、ふりかえってみよう。いわゆる近代的な海軍は、パフラヴィー朝第2代のシャー、モハンマド・レザー時代(在位1941 - 1979年)にはじまる。同時代の海軍はニールーイェ・ダルヤーイーイェ・シャーハンシャーヒーと呼ばれた。「帝国海軍」である。しかし、その実態は、1964年にアメリカから「相互援助計画 Mutual Assistance Program」によって導入したPF 103級コルベット(Corvette) 2隻によってはじまったともいえよう。

コルベットは、基準排水量900トン、満載排水量1135トン。兵装は7.6センチ単装砲2門、ポフォース40ミリ連装機関砲2基という簡素なものであった。これらは、バヤンドル(81 بیندر)、ナグディー(82 نقی)とよばれた。ともにリビングストン造船所で1962年に起工。進水が1963年の7月と10月。引き渡し当時は新鋭艦であったが、イラン・イラク戦争時には老朽化は否めなかった(『ジェーン海軍年鑑』、p.268)。

1967年1月には、元英国海軍駆逐艦アルテミズ(バトル級D 60 *Artemiz*)が、イラン帝国海軍にサウサンプトンで譲渡、ダマーヴァンド(دماوند)と命名され、ヴォスパー社で改装工事を受けた後、1970年に就役した。ダマーヴァンドは、基準排水量2325トン、満載排水量3360トン、出力5万馬力の蒸気タービン推進、兵装は、11.4センチ連装砲2基というもので、GDCスタンダードSM-1等のミサイルを装備して近代化はしたものの、この時点で艦齢25年に達する老朽艦であった。

一方アメリカは1971、1972年に、2隻の駆逐艦、ゼラースとストームズ(ア

サバラーンの生涯

レン M. サムナー級 DD 777 *Zellers*、DD 780 *Stormes*) をイランへ譲渡した。これらは、ダマーヴァンドよりもさらに古く、進水がともに1944年で、フィラデルフィア海軍工廠にて近代化工事を受けた。内容は、ミサイルの装備のほかは、空調の改良等の湾岸地域での就役に備えたものであった。2隻は、バブル (بیر)、パラング (پلنگ) と命名された。排水量は基準2200トン、満載3320トン、6万馬力の蒸気タービン2基、12.7センチ連装砲2基、ミサイルはGDCスタンダードSM-1を装備していた (『ジーン海軍年鑑』、p.267)。

このように、1970年代初頭にあつて、イラン海軍でもっとも新しい艦は、ロスタムをはじめとするサム級のフリゲート4隻であった。

パフラヴィー朝時代のイラン海軍は、シャーの権力と威光を示すために作られたものであったともいえよう (*Iran's Naval Forces*, p.1)。それが一転して歴史の舞台で活躍するようになるのは、イラン革命以降、特にイラン・イラク戦争 (1980 - 1988年) 勃発後のことである。

イラン海軍の基地

イラン海軍の作戦海域は、オマーン湾・ペルシア湾、インド洋、カスピ海の3つに大別される。

ペルシア湾では、バンドレ・アッパース、ブーシャフル、ハールグ島、ホッラムシャフルに基地があり、バンドレ・アッパースが中心である。インド洋に対しては、チャーフ・バハール (バンドレ・ベヘシュティー、1989年段階では建設中)、カスピ海では、バンドレ・パフラヴィーに訓練基地があったが、イラン革命後は、バンドレ・アンザリーと改名された。ホッラムシャフルには、ホバークラフトの基地があったが、イラン・イラク戦争の舞台となり、一時イラクが占領、のちにイランが奪回した。地名も「流血の町」を意味するホニー・シャフルと呼ばれたが、現在ではホッラムシャフルに戻っている。バンドレ・ホメイニーにも小基地がある。

バンドレ・アッパース (第一軍管区)、ブーシャフル (第二軍管区) には、正規海軍、革命防衛隊海軍 (後述) がそれぞれ独自に司令部を持ち、計4つの

司令部が存在していた (*Iranian Persian Gulf Strategy*, p.3)。

イラン革命とイラン海軍

1979年のイラン革命 (エンゲラーベ・エスラーミー) 後、海軍は、「イラン・イスラム共和国海軍」(ニールーイエ・ダルヤーイーイエ・アルテシェ・ジョムフーリーイエ・エスラーミーイエ・イーラーン) と名称が変更された。一方、ホメイニーによって、1979年5月に、従来の軍隊と並んで革命防衛隊 (セパーヘ・パースダラーネ・エンゲラーベ・エスラーミー) が創設された。海上兵力において革命防衛隊が海軍と並んで、もうひとつの柱となったのは、1985年の7月からである (*Iranian Persian Gulf Strategy*, p.2)。これは「イラン革命防衛隊海軍 ニールーイエ・ダルヤーイーイエ・セパーヘ・パースダラーネ・エンゲラーベ・エスラーミー」と呼ばれた。アメリカ側では、IRGCN (Islamic Revolutionary Guards Corps Navy)、イギリスでは IRGN (Iranian Revolutionary Guard Navy) と称する (これに対して、正規海軍を IRIN という。“History of Iran’s Naval Forces and the Importance of the Strait of Hormuz”, p.1)。

革命防衛隊海軍は、兵は約2万名、正規の海軍とは異なり、小型のスピードボート (スウェーデン製のボガマール *Boghammar* 13型スピードボート・7名乗り組み、12.7mm 機銃1、PRG-7ミサイル装備)、魚雷艇 (北朝鮮製の IR-S18、IRS-16等)、ミサイルボート (中国製の *Thondar* 型) を主体とし、対艦ミサイル (中国製の C-802、C-702、TL-10、シルクワーム) も保有する。

正規海軍は、兵員1万5千。水上艦艇18隻 (1985年段階) であったが、修理部品の入手難から、実動は、この半分程度であったという (*Iranian Persian Gulf Strategy*, p.2)。

海軍と革命防衛隊海軍とは、命令系統も異なり、統一的な指揮運用には困難が伴った。基地は、両者が共通に使用していたが、作戦行動も別個に行われた。1987年には、両者を統合する試みもなされたが、革命防衛隊海軍側が同意せず、計画は流れてしまった (*Iranian Persian Gulf Strategy*, p.3)。

イラン・イラク戦争とイラン海軍

1980年9月22日に、イラク軍の空爆、ホッラムシャフル攻撃によってはじまったイラン・イラク戦争は、「西側諸国」とソ連、アラブ諸国のイラク支援、それに対するイラン側の革命防衛隊をはじめとする多数の死者を出した人海戦術によって長期化した。戦いは、互いの石油輸出を妨害することによって経済的打撃を与えようとして、オマーン湾、ペルシア湾を舞台に、第三国のタンカーや商船に対する攻撃にまでエスカレートした。いわゆる「タンカー戦争」(Tanker War 開戦から停戦までの1980 - 1988年と広くとるもの、イランもタンカー攻撃に加わった1984 - 1988年とするもの、アメリカが介入した1987 - 1988年とするものの3つの解釈がある)である。

Navias と Hooton による *Tanker Wars* は、イラン・イラク戦争開始の1980年から停戦までの1988年と、長期にわたって、両国の攻撃により被害を受けた船舶を船籍の国名、船舶名、どちらの側から何によって攻撃されたかを Lloyd's の保険記録 (Lloyd's List, Lloyd's Register) などをもとにして詳細に記録している。それによると、

1981 - 1983年は、イラク側からの攻撃のみで、攻撃された船舶数が合計61隻であった。攻撃の手段の内訳は、航空機7、ヘリコプター53、機雷1となっている

1984年、イラク側から攻撃された船舶が52隻。航空機によるもの31、ヘリコプターによるもの21であった

1984年、イラン側からの攻撃がはじまった。被害は総計19隻。航空機によるもの18 (うち1は疑問)、不明が1となっている (別の箇所では機雷によるもの2としている)

1985年、イラク側から攻撃された船舶は、総数33隻。すべて航空機によるものだった

1985年、イラン側から攻撃された船舶は、総数17隻。航空機によるもの13、

ヘリコプターによるもの4であった

1986年、イラク側から攻撃された船舶は、総数62隻、すべて航空機によるものだった

1986年、イラン側から攻撃された船舶は、総数41隻、内訳は航空機によるもの8、ヘリコプターによるもの28、フリゲートによるもの3、革命防衛隊によるもの2だった。この年から水上艦艇による攻撃がはじまったことになる

1987年、イラク側から攻撃された船舶は、総数97隻、内訳は航空機によるもの96、不明が1となっている

1987年、イラン側から攻撃された船舶は、総数87隻、ヘリコプターによるもの2、フリゲートによるもの17、高速襲撃艇(FAC)によるもの2、革命防衛隊によるもの56、機雷によるもの10となっている

1988年、イラク側から攻撃された船舶は、総数40隻、すべてが航空機によるもの

1988年、イラン側から攻撃された船舶は、総数48隻、フリゲートによるもの5 (うち1は、高速襲撃艇(FAC)によるもの?)、革命防衛隊によるもの42、機雷によるものが1であった (*Tanker Wars*, pp.65, 74 75, 88, 100, 107, 118 119, 133 135, 166 167, 172 173)

この一覧から、当初は、イラク側からの攻撃ばかりであったものが、1984年からイラン側も攻撃をはじめたことがわかる。

イラク側の攻撃がもっぱら航空機、ヘリコプターによるものであったのは、航空勢力ではイランを量的に圧倒していたこと、海軍が弱体で整備が遅れていたことによる。イラク海軍へのフリゲート4隻とコルベット6隻の就役は、やっと1986年からはじまる状況であった (『ジーン海軍年鑑』, pp.273 274)。

一方、イラン側が攻撃に海上勢力を投入したのが1986年からで、その大部分が革命防衛隊のスピードボートによるものである。イランのフリゲートが攻撃に参加したのは、同じく1986年からであり、1988年までのフリゲートによる被

サバラーンの生涯

害総数は25隻（うち2は高速襲撃艇？）であることがわかる。フリゲートの個々の名前は記載されていない。高速襲撃艇についても記載はないが、正規海軍のカマーン級高速襲撃艇のことであろう。

サバラーン艦長・キャプテン・ナスティー (Captain Nasty)

上記のように革命防衛隊は、1986年（未ごろ）から、機関銃とミサイルで武装したスピードボートによって、頻繁にタンカーに対して、「一撃離脱」攻撃を繰り返すようになった。海軍も革命防衛隊海軍も、主として、上述のようにバンダレ・アッパーズとブーシャフルを基地としていたが、両者の間には連携はなかった。

革命防衛隊海軍は、航路への機雷の敷設、あるいは航行する船舶のブリッジや居住区への機銃掃射という直接的な手段をとった。

一方、正規海軍も、ときに同じ方法を取り、特に、「サバラン *Sabalan* (ママ) という名の英国製のサーム級フリゲートは、その行為によって、悪名高かった」とされる。サバラーン艦長は、アメリカ人には、「キャプテン・ナスティー」として知られていた。「艦長は、クウェート、イラク、サウジ・アラビア行きのタンカーや商船に対して、『友好裡に臨検』(friendly inspection) を行うとみせかけ、時には船長と会食すらした後で、『無防備の獲物』に攻撃を加えることもあった。「キャプテン・ナスティー」は、別れ際に無線で「ごきげんよう (Have a nice day)」との挨拶をすることもあったという」(2004年3月31日、マーク・ヴァン・ダイク Mark Van Dyke (当時・海軍大学教官) からの聴き取り。 *Danger Zone*, p.8)。

「キャプテン・ナスティー」には、「けがらわしい艦長」の意味はもちろんあるとして、アメリカのジャズ・オルガニスト、ジョン・パットン John Patton (1935 - 2002年) による同名の歌をもじったものであろうか。

サバラーンと、その姉妹艦であるサハンドとは、湾岸の商船の恐怖の的となったが、当時アメリカは中立の立場をとっていたので、傍観するほかはなかったという。

「キャプテン・ナスティー」の名が広まったのは、ペルシア湾を航行する商船の無線士たちの間であったともいう。イランのフリゲート艦長の大多数は、タンカーの船殻を狙って射撃し、火災を起こさせることはあっても、二重底の船体を沈没させるまでには及ばず、乗員も救命ボートで脱出するか、消火用のタグボートに曳航され、乗船したまま港へ入ることができたという。それに対して、サバラーン艦長は「狂信的」であって、ブリッジや居住区に狙いを定めて射撃したという (*No Higher Honor*, p.181)。

サバラーンの「悪行」を伝えるものを、もうひとつ紹介しよう。「アメリカ海軍がどうしても攻撃しなかったイランの艦 (フネ ship) があつた。フリゲートのサバラン (*Sabalan* ママ) である。...中略... 過去数年にわたって、それ (*it* ママ) は、中立国の商船を攻撃するというので、「血なまぐさい評判」を得ていた。船員の居住区に向けて、悪辣にも砲火を集中させることを常としていた。数回、サバラン (ママ) は、ホルムズ海峡で船舶 (複数) を停船させ、乗り込んで、行く先と積荷について臨検した。あるイランの海軍士官 (単数) は、丁寧に船長に、臨検への協力を感謝し、「*bon voyage and a good trip*」と言って、フリゲートに戻っていき、それからイラン艦は、銃撃やミサイル攻撃をした後で、無力な犠牲者を解放した」とする (*Tanker War*, p.206)。

これも基本的に同じパターンの話である。伝聞であるとしても、その根拠、出典は示されていない。*Tanker War* は、いわゆる「タンカー戦争」についての最も詳しい専論のひとつであるが (*Tanker Wars* とは別の書)、同書中で、サバラーンの「非人道的行動」はもとより、同艦によるタンカー攻撃の個々の具体例はひとつも取り上げられていない。

ただし、「サバラン (ママ) と同じように悪質だった」として、同型艦のサハントについては、本書には、次のような記述がある。

「アメリカのミサイル・フリゲート・ギャリー (FFG 51 *Gary*) が、1988年5月にドバイ沖12海里に停泊していた、ノルウェー (船籍はシンガポール) の硝酸アンモニウム・タンカーのハヴグリムト (*Havglimt*) と、サハントとの間の交信を傍受した。サハントが、タンカーの船長に質問し、それが終了したと

き、協力を感謝し、「ごきげんよう (Have a nice day)」と通信、4000ヤード (3658m) 距離をとったところで、4.5インチ砲を発射した。2 艘の IRGC 高速艇が攻撃に参加、ハヴグリムトの船員 2 名を殺害した。攻撃開始前に交信を聞いたギャリーは、17000ヤード (15545m) 離れていて、視界外であった。攻撃開始後に現場を視認する距離に近づいてみると、イラン側のフリゲートと gunboats (ママ) が、(タンカーの) クルーのいる区画にむごたらしく砲火を集中させていることが明らかだった」(Tanker War, p.207)。

チャンネル16でギャリーは、ハヴグリムト乗組員が救助を求める声と爆発音を聞いた。ベテア艦長 (Commander Bethea) は、傍観するにしのびず、介入を決意したが、司令部よりその行動は許されなかったという (ベテア艦長の証言 Tanker War, p.207)。これを一読すると、ギャリーが、直接現場を確認したかは、微妙な書き方であるとわかる (Tanker Wars では、1 隻のフリゲートと 2 艘の革命防衛隊艇が攻撃し、2 人が死亡したとしている。こちらには、フリゲートの艦名はない。Tanker Wars, p.170)。

いずれにせよ、サバラーンへの「怨念」が、後述のアメリカ側の攻撃を生む遠因となったのは間違いない。

サバラーンの艦長は、イラン海軍のアブドッラーフ・マーナヴィー (عبد الله معنوی) 少佐 (後に少将となって2000年には、イラン海軍のスポークスマンをつとめる) であった。マーナヴィー少佐は、1980年にカマーン級高速襲撃艇ペイカーン (پیکان 基準排水量234トン) の艇長となり、1988年にはサバラーンの艦長となった。この間一貫してイラン・イラク戦争の前線にあったことになる。

彼は、自らの戦歴を3つの段階に分けて回顧する。第1が、ペイカーンを指揮したイラクとの戦い。「真珠作戦」(1980年11月8日、イラクのレーダー監視哨のあるアル・バクル、アル・ウマイヤの二つのオイル・プラットフォームを攻撃した作戦。ペルシア語名は、アマリヤーテ・マルヴァーリード (عملیات مروارید) に従事した時。第2は、自国の商船・タンカー護衛にあたった段階。第3が、アメリカが介入して以降で、イランのオイル・プラットフォー

ムが破壊され、サバラーンが攻撃を受けたこと。その生涯を淡々と語る口調には、「エキセントリックな」ものは、感じられない (روایت فرمانده نلوچه / بیکان از دفاع مقدس ایران, p.3 『エツテラーアート』2008年9月26日、マーナヴィー元艦長の「証言1」)。

また、『共和国新聞』でのインタビューでは、次のように語り、国際法に従ってイラク行きの商船を臨検していた体験を陳述している。「オマーン湾での戦いの日々において、イラクが他国の船を使って、物資、戦車、大砲、糧秣を我々の許可なく輸送することを黙認することはなかった。我々がオマーン湾を航行しているとき、一隻の商船を発見し、停船命令を出した。その船の船長は、『私はアメリカ人だ』といった。我々は、『お好きなように。我々は臨検をしなければならぬ』と応じた。船長が『停船しない』といったので、我々は併航して、空中にミサイル2発を発射したところ、船は停船した。

臨検隊 (ティーム・タスリーフ) を船内に送って臨検したところ、この船は、一隊のアメリカ人将校と、その家族を、いくつかのアラブ諸国に輸送する目的を持っていることが判明した。このような船を海上で見るとは、また臨検しなければならぬと主張するとは、思ってもいなかった。我々は、それまで、さまざまな船を停止させ、臨検していた。国際法もそれらを臨検することを許していた。もし積荷がイラク向けでなければ、我々は航行の許可を与えていた。

船長はいった『貴官にその権利はない』と。私は『しかと貴船を臨検しなければならぬ』といった。これは、ペルシア湾とオマーン湾にアメリカ船が存在していた状況の下においてであった。船長はレーダーと無線機を作動させて、苦情と救援を申し立てた。我々はいった『よし (ホブ)。アメリカ船を含めて、世界中が声を聞いたろう。一隻のアメリカ船がイラン側に停船させられていること、臨検隊が乗り込んでいることを理解したろう』と。

15~20分が過ぎた。ふいに一機の飛行機が現れた。アメリカ船の船長は『見る。アメリカ機だ。これで決着がつくぞ』といった。しかし、残念なことに、これはわが方の飛行機だった。我々が増援を求めていたのだった。臨検後、商船がイラクに利するものを何も積んでいなかったのだから、我々は『航行してもよ

サバラーンの生涯

い』といった」(『共和国新聞』、2009年9月8日、マーナヴィー元艦長の「証言2」)。

マーナヴィー元艦長は、これとは別の機会に、ファールス通信に対して、イラクとの戦争において、イランの船舶護衛に任じたときの体験を語っている。マーナヴィー少将は、ドイツに留学経験があり、そのときに食料供給路の確保、船団護衛の重要性を知ったという。また、船団護衛では、1日に35ユニットも警護したことがあったという。「海上生活が続き、1月に1度しか家族に電話で話せなかった」というのは、いかにもイラン人らしい感想といえる。

「船団護衛中の戦闘機が、ぼんやりしている船に、(攻撃の) ターゲット・ロックオンして、目をさまさせた」という、臨場感あふれるエピソードも紹介している(マーナヴィー元艦長の「回顧談」)。

サバラーンとサハンドは、1987年12月、3隻のクウェートタンカーを攻撃した。このとき、クウェートのタンカーは、自国の旗を掲げていた (*Danger Zone*, p.163)。 *Tanker Wars* には、この月イランのフリゲートから攻撃されたものとして、*Tharaleos* (11日・ギリシア船籍)、*Ariadne* (15日・ギリシア)、*Stena Concordia* (22日・リベリア)、*World Progress* (23日・リベリア) の名があげられているが、攻撃側の艦名の記載はない (*Tanker Wars*, pp.137-138)。

1987年7月24日に、アメリカ海軍は「アーネスト・ウィル作戦 Operation Earnest Will」を発動、クウェート船籍でもアメリカ国旗を掲げたものは護衛する方針を打ち出した。これが、ペルシア湾における紛争に対する、アメリカの最初の具体的な介入となった。しかし、当時、アメリカ海軍は、アメリカ国旗を掲げる商船(臨時にアメリカ船籍となって、同国国旗を掲揚する11隻のクウェート船を含めて)以外を護衛することには踏み切れなかったのである (*Danger Zone*, p.163)。

ペルシア湾におけるアメリカとイランとの間の敵対関係を、年代ごとに整理してみよう。

86年1月12日 アメリカ船籍のプレジデント・テイラー (*President Taylor*)

をイラン艦が臨検。イラク向けの軍需品を捜索 (*Gulf of Conflict*, p.3)

- 87年7月21日 「アーネスト・ウィル作戦」を宣言
- 87年7月24日 アメリカ国旗を掲げたクウェートのタンカー、ブリッジトン (*Bridgeton*) がファールシー島付近で触雷 (「アメリカが関係した」「Tanker War」の開始 (*America's Forgotten Tanker War with Iran*, p.31, *No Higher Honor*, p. xv、CIA 報告は、これをイランのダイバー (複数) が夜陰に乗じて仕掛けたとする。国際司法裁判所・アメリカ側の答弁書と反訴、p.22所収の報告)
- 87年8月6日 中東軍司令長官バーンセン提督 (Admiral Bernsen) がイランの機雷敷設、IRGC による小型艇の攻撃に対処するための作戦計画を CENTCOM (後述) に提出 (*Gulf of Conflict*, p.5)
- 87年9月21日 バフライン付近で、暗夜に乗じて機雷 (SADF-02) 敷設中のイラン・アジュールが米海軍に拿捕される
- 87年10月8日 ファールシー島付近でアメリカの解を護送中の同国の AH 6 *Seabats* がイランのボガマール13型スピードボート数隻と小型艇を撃沈
- 87年10月15日 クウェート海域でシルクワーム・ミサイルが、アメリカ企業の所有で、リベリア船籍のタンカー・スンガリー (*Sungari*) に命中 (後述)
- 87年10月15日 クウェート海域でアメリカ国籍のタンカー・シー・アイル・シティ (*Sea Isle City*) にシルクワームが命中 (後述)
- 87年10月19日 アメリカが報復として、イランのオイル・プラットフォーム、ロスタム (رستم 別名・ラシャダト (رشدت)) を破壊
- 88年4月14日 アメリカのミサイル・フリゲート、サムエル B.ロバーツ (FFG 58 *Samuel Booker Roberts*) が、イランのロスタム油

サバラーンの生涯

田付近で触雷

88年4月18日 アメリカが「カマキリ作戦」を發動
(特に注記のない個所は *Tanker War*, p.174による)

ザタラインによると、サムエル B. ロバーツは、1988年2月にペルシア湾に投入されたが、その後アメリカ国旗を掲げる船団を護送中に、数度にわたってイランのフリゲート、駆逐艦に接近威嚇されることがあった。また、時には、船団を攻撃しようとするイラン艦艇との間に割って入って、防護したこともあったという。このときは、まだアメリカ側から攻撃することはなかったという (*Tanker War*, pp.187-188)。

カマキリ作戦 (Operation Praying Mantis)

アメリカ海軍は、船団の護送からエスカレートして、88年4月に実力行使に踏み切った。これが「カマキリ作戦」である。米海軍当局は、これをミッドウェイ海戦 (1942年) を含めて、同国海軍の5大作戦 (うち3つは、19世紀のもの) のひとつであり、第二次大戦後では、最大の海戦であったと自賛している。

きっかけは、同年同月14日、臨時にアメリカ船籍として、同国国旗を掲げたクウェートのタンカーを護衛していた、上記のサムエル B. ロバーツが触雷した事件であった。同艦は、艦底に破口を生じ、主機関室・補機室に被害を受け、これらの個所に浸水しながら、かろうじて帰還したという (*No Higher Honor*, plates between pp.74&75)。

サムエル B. ロバーツが機雷に触れた付近を捜索したアメリカ海軍のダイバーが、海底にあった機雷を回収し、調査したところ、11桁のシリアルナンバーからイランの機雷敷設艦イラン・アジュール搭載のものであることが判明したとして、軍事行動に踏み切ることとなった。

イラン・アジュール (ایران اجر 31名乗組)。艦長は通常任務時より2階級上のバルヴィーズ・ファルシュチアン中佐) は、韓国製で、基準排水量614トン。旧名をアールヤ・ラフシュといい、海軍籍ではなく、「共和国海運」籍の仮装敷

設艦 (同型艦がほかに3隻 “Iranian Warships”, Global Security.org/ <http://www.globalsecurity.org/military/world/iran/ships.htm>) で、拿捕時には艦尾に、アールヤ・ラフシュの名のうちアールヤが消され (イラン革命後に消されたのであろう)、ラフシュはそのまま書かれていた。1987年9月21日に、イラク船のほとんど通らない航路上に、深夜、機雷を敷設しようとしているところをアメリカ海軍の武装ヘリコプター TF-160に攻撃され、遺棄されたところを翌日拿捕されたものであった (*Danger Zone*, pp.92-106)。この時、ドラム缶を偽装して艦上に残されていた残りの機雷に刻まれた番号が、一連のものであることが判明したという。

サムエル B. ロバーツの艦長のパウル・サヴィアー・リン中佐 (Cdr. Paul Xavier Rinn) は、かねてから「タンカー戦争」で手をこまねいている立場には我慢がならなかったようで、サハンドとサラパーンの「悪行」については、「非武装の船に対するやり方は『殺人者』のそれに他ならない。彼らは、ブリッジめがけてロケット弾を発射したり、機銃や、小口径の火器を使ったりしている。一度、ドイツのタンカーを停止させたときなど、抗議されるや、ブリッジを銃撃して、全員を殺害したこともあった」という。彼らは疑いもなく「誰がどうみても、無情な無差別殺人者の一団」であると、前述の証言者たちと同様のことを述べている (*Danger Zone*, p.165)。これらの証言は、いずれも伝聞に基づいていることで共通している。

ドイツのタンカー名と「全員殺害」については、筆者は、該当するものを確認することができなかった。イラン・イラク戦争期間中の、相互のタンカー攻撃を含め、「タンカー戦争」を1980年から1988年ととらえ、この間に攻撃を受け、損傷したタンカー、商船、艦艇をデータベースにしたもの、表にして一覧できるものがある。それらを検索すると、1984年、ドイツの補給船 *Seatrans-21* (500トン (重量トン?)) の事件がある。これは、1984年9月16日に、ハールグ島南方で、イラクのミサイルによって撃沈されている (*Arabian Peninsula & Persian Gulf Database: Tanker War, 1980-1988, The Iran-Iraq War and the Lessons of Naval Conflict*, XIV-4-9)。一方、被害状況をまとめた *Tanker Wars*

には、それ以外にイラン側から攻撃を受けた4隻の西ドイツ船籍の船がリストアップされている。内訳は、1985年に航空機による被害を受けたもの2隻、1987年に機雷によって損傷したもの1隻、1988年に革命防衛隊による攻撃を受けたもの1隻（このときは、死者1名、負傷者2名を出している）で、フリゲートによる被害は確認できなかった（*Tanker Wars*, pp.110, 136, 172）。しかも、これらは、BC（パラ積み船）、C（コンテナ船）、RR（自走車両用船）、GDC（汎用貨物船）であって、タンカーは含まれていなかった。

さて話を戻すと、一般商船の航行する航路上に機雷が敷設されたことは、アメリカ海軍を報復作戦へと駆り立てる要因となった。しかし、「カマキリ作戦」とは、ペルシア湾上のイラン側のオイル・プラットフォーム（Oil Platform سکوی نفتی 正確には、ガス・オイル分離プラットフォーム GOSP）、サーサーン（سارسان）とシーリー（سیری）を攻撃することが当初の目標であった。これらのプラットフォームには、イラン側の監視哨があって、同時に革命防衛隊が航行する船舶にミサイル、ロケット砲攻撃を加える基地となっていたとする。これにフリゲートのサバラーン攻撃が加えられ、目標は3つとなった。

機雷の敷設とサバラーンとは、本来なんの関係もないのだが、それまでくすぶっていた憎悪の念が、作戦に新たな目標を与えることとなったのであろう。この点では、アメリカ側の意思決定も、感情に流されていた面がある。触雷したサムエルB. ロバーツが、ガダルカナルで戦死した海兵隊の「英雄」の名にちなんだものであったことも、彼らにとって一種の精神的な影響があったかもしれない（3代にわたる同名の軍艦の歴史については、*No Higher Honor*, pp. xiii-xvi を参照）。

機雷がイラン側のものであると「判明」したのが、4月15日。レーガン大統領は、イラン本土への攻撃には慎重で、ペルシア湾上のオイル・プラットフォーム攻撃を選択した。国防総省は、これに水上艦艇への攻撃を追加した。「彼らわが方のフリゲートを1隻やった（got）のだから、我々も彼らのフリゲートをやることを望んだ（wanted）」（某高官の後日の発言、*Tanker War*, p.206）。ちょうど、格好の艦があった。それがサバラン（ママ）だったというわけであ

る (*Tanker War*, p.206)。しかし、レーガン自身がイラン艦艇の中でも、特にサバラン (ママ) 攻撃を望んだという説もある (“Regan had pointedly expressed a desire it to be the frigate *Sabalan*”, *America's Forgotten Tanker War*, p.31)。

サバラン攻撃こそが、「カマキリ作戦」の目的だったと公言するものもある。「タンカー戦争の間、商船乗組員たちは、ある艦を特に軽蔑していた。サバラン (ママ) である。その艦長は、公海上における最大の凶漢 (thug) とみなされていた。少なくとも半ダースのアメリカ海軍の艦艇が、サバラン (ママ) による威嚇攻撃 (mock attack) を記録している。『カマキリ作戦』の目的をよくふりかえてみれば、2つのオイル・リグ (ママ) 攻撃と、革命防衛隊の小型艇部隊への付随攻撃は、特に1隻の軍艦を撃沈するために計画されたものであった。当時だれもが心の中で撃沈したいと思っていたのが、サバラン (ママ) であった」との懐述は、その前提となった認識が正しかったかはさておき、正直な感想であったといえよう (“Observing the Hormuz Strait Incident”, pp.3-4)。

ペルシア湾の長い日・1988年4月18日

4月18日、米海軍は「カマキリ作戦」を開始した。これに先立って、水上艦艇を3群にわけ、それぞれに目標を設定した。

SAG (Surface Action Group) ブラボー (Bravo) : サーサーン・オイル・プラットフォーム攻撃

駆逐艦メリル (DD 976 *Merrill*)、ミサイル駆逐艦リンデ・マコーミック (DDG 8 *Lynde McCormick*)、ドック型揚陸艦トレントン (LPD 14 *Trenton*)

SAG チャーリー (Charlie) : シーラー・オイル・プラットフォーム攻撃

ミサイル巡洋艦ウェインライト (CG 28 *Wainwright*)、フリゲート・バーグレイ (FF 1069 *Bagley*)、ミサイル・フリゲート・シンプソン (FFG 56 *Simpson*)

サバラーンの生涯

SAG デルタ (Delta) : 水上艦艇攻撃

ミサイル駆逐艦ジョセフ・ストラウス (DDG 16 *Joseph Strauss*)、ミサイル・フリゲート・ジャック・ウィリアムス (FFG 24 *Jack Williams*)、駆逐艦オブライエン (DD 975 *O'Brien*) (*Danger Zone*, pp.196, 209, *Gulf of Conflict*, p.8)

旗艦：多用途指令艦 コロナド (AFG 11 Miscellaneous Command Ship *Coronado*) レス (Less) 少将座乗 (*Danger Zone*, p.173、艦形・艦籍番号は、『ジェーン海軍年鑑』による)

これに支援として原子力空母エンタープライズが加わった。

作戦発動命令書には、現地時間午前5時 (アメリカ時間午後10時) にレーガン大統領が署名した (*No Higher Honor*, p.182)。

エンタープライズでは、前夜のうちにサバラーン的位置についての情報を得て、早朝より艦載機を発艦させて、ホルムズ海峡を哨戒し、サバラーンを索敵していたが、目標を発見することはできなかった。海上が漁船を含めて大小さまざまな船で込み合っていて、「奴 (guy (ママ) サバラーンのこと) の発見が難しかったのが、一番の問題だった。(索敵機の) 連中は各種探知機、そのほかすべての『商売道具』を使って発見にこれ努めていた」(VA-95の前任将校ジョン・ショルク中佐 Cdr. John Schork の証言、*Danger Zone*, p.206)。しかし、月曜日に届いた「最終指令」では、実際には、サバラーンへの攻撃命令は含まれていなかった。空母艦載機の側では、それに気付かず、終日サバラーンを捜索して撃沈することが使命であると思って、行動していたことになる (*Danger Zone*, p.206)。

黎明時にティム・マシュー中佐指揮のSH-60シーホーク (*Seahawk*) が、トレントンから発艦、サーサーン・オイル・プラットフォームに向かった。次いでSAGブラボーが行動を開始。ついに作戦がはじまった。シーホークは、プラットフォームに銃撃を行い、負傷したものが退去するのを監視していた。次いでCH-46ヒーローが海兵隊員を乗せてトレントンを発艦 (*No Higher Honor*,

p.182)。以下、時間にそって、当日の状況を簡単に振り返っておく。

- 7 : 00 イラク軍がクウェートとイランのペルシア湾岸地帯の中間にあって戦略上の要衝であるファウ半島に攻撃を開始。これがイラン側に、イラク、アメリカが意図して同時攻撃に出たと思わせることになる
- 7 : 55 メリルの艦長が英語・ペルシア語で「5分以内に退去せよ」と警告放送。イラン兵がタグボートに殺到し、サーサーン・オイル・プラットフォームを退去
- 8 : 00 シーリー・オイル・プラットフォームを SAG チャーリーが砲撃、高圧タンクが爆発して大火災。イランのタグボートとウェインライトの救命艇が、海上の生存者を救助
- 8 : 04 メリルが発砲し、サーサーン・オイル・プラットフォームに残った ZAU 対空砲を沈黙させる
- 9 : 25 CH-46 (複数) がプラットフォームに降下してプラスチック爆弾をしかけるとともに (爆弾は正午ごろ爆発)、情報部員が機密資料捜索を行う
SAG デルタのみは、目標艦を発見できず、索敵を継続
- 11 : 00ころ イラン空軍の F-4戦闘機が発進。ホルムズ海峡に向かう。トムキャットに迎撃されて避退、5隻のボガマル型スピードボート (革命防衛隊) がアブー・ムーサーから出撃、機銃、小型ミサイルを船舶、石油リグ、送油施設に発射
- 11 : 30 イランの高速襲撃艇ジューシャンが SAG チャーリーのレーダーに捕捉される
- 12 : 15 SAG チャーリー、ジューシャンを攻撃 (後述)
- 13 : 15 東方海域でイランの gunboats (ママ) が英国船籍で洋上の石油タンクとして使用中のヨーク・マリーン (York Marine) を攻撃 (*No Higher Honor*, pp.182 185)

サバラーンの生涯

14時59分、イランのフリゲート・サハンド (F 74 ベフルーズ・シャーロフ艦長) がオイル・プラットフォーム攻撃に対抗して、バンドレ・アッパーズを出港、アメリカ側は、これがどのフリゲートかを判別できず、ハーブーン攻撃が行えるだけ沿岸から離れるまで待つこととした。

サバラーン撃沈のための攻撃を立案し、自ら攻撃隊長をつとめたラングストン中佐 (Cdr. A. Langston エンタープライズ副飛行隊長) は、同艦を撃沈するためには、マニュアルにある500ポンド (227キロ) 爆弾では不十分であるとして、貫徹力のある2000ポンド (907キロ) 爆弾を搭載することを主張、45分にわたる押し問答の末、それよりは小型の爆弾を搭載することで納得した。攻撃機はA-6イントルーダー、A-7コルセアとし、一部の機にサバラーン撃沈に可能な爆弾を搭載し、護衛にF-14トムキャットを随伴させることとした。つまり、すくなくとも攻撃の当事者は、威嚇、警告ではなく、対象をサバラーンとして、これを撃沈する明確な意図を持って作戦を遂行していたことになる (*Danger Zone*, p.195)。

ラングストン中佐の証言：「サバラン (ママ) が出港して洋上に出るかもしれないとの、『賭けてもいいよ、というほどの』情報を得ていた。バンドレ・アッパーズ港には入れないが、恐ろしいほど接近した。(ホルムズ) 海峡を抜けることは許されていたので、同港を右に見て、その海域を監視した」

待つほどもなく、同機はサハンドが出港するのを目撃する。「我々の高度はおそらく15000 - 20000フィート (4572 - 6096m) であった。大きな航跡をひいて、高速で一隻のフリゲートが出港してくるのを発見した。サーム級のフリゲートだ」 (*Danger Zone*, p.209)。

同中佐はA-6を目標艦めがけて急降下させ、2マイル後方、海面すれすれで引き起こしたところ、イラン艦が発砲してきた。「ありがたいことに、それが非友好的であるとわかった」。50ヤード (45.7m) 近くを航過したとき「それは、あきらかにサバラン (ママ) の艦番号を付けていて、対空砲と肩担式の火器を撃ってきた」ので、上昇して15マイルの安全距離をとった (*Danger Zone*, p.208)。

ラングストーンはエンタープライズに目標発見を連絡するとともに、攻撃機の発艦を指示。イラン艦に対しては、先に発砲したことを理由に攻撃する権利を得たが、「聴いているかはわからなかったが、攻撃するので、5分のうちに退艦するよう呼びかけ、それから攻撃することにした」(*Danger Zone*, p.208)。

まずラングストーン機が攻撃。空対艦ミサイル・ハーブーンを発射。これが艦橋の真後ろに命中した。艦は煙を吹いて、すぐに停止した。次いで、レーザー誘導で1200ポンド(544キロ)のスキッパー(Skipper)爆弾2発を投下した。エンタープライズから到着したショルク(Shork)指揮の攻撃機A-7が「さらに威力を増すため」近距離からハーブーンを発射した。接近してきた海上部隊のSAGデルタのジョセフ・ストラウスが、さらにハーブーンを発射、両方がほぼ同時に着弾した。「あれほど多くの無力な商船にテロ攻撃を加えた、あのフリゲートは、圧倒的な攻撃にさらされていた」。熱狂と興奮がそのまま現れている報告である(*Danger Zone*, p.210)。

しかし、これはサバラーンではなく、姉妹艦のサハンドであった。艦首に書かれた艦番号74(サハンド)を73(サバラーン)と読み違ったのであろうか。*Danger Zone*は、「フリゲートは、その前に艦番号を変更していた(the frigates had recently switched the hull numbers)」と注記しているが(p.208)、これは分類上の艦番号の変更(DE 73 F 73、DE 74 F 74)を誤解したものである。艦首に書かれた番号そのものには変化はなかった。

ショルク機が数分後に、さらにスキッパー爆弾を、「まだ燃えていない箇所」をめぐって投下したのち、「十分な効果をあげた」と感じて「退艦する連中を傷つけることは任務ではない」として、母艦に帰投した(*Danger Zone*, p.210)。

これより先、レス少将は、15時ころ、SAGデルタに対して「サハンドが近くにいる。やれ(Take him ママ)」と無線で指示している(*No Higher Honor*, p.186)。

イラン側は、救援艇を派遣したが、アメリカ側は、これには介入せず傍観していた。サハンドは、全艦炎と煙に包まれていたが、同日夜、弾庫が誘爆して沈没した。イラン側の発表では、死者45人、負傷者が87人であったという

(*Danger Zone*, p.211)。ほとんどの乗員が死傷したことになる。艦長は負傷しつつも生還したという。

一方、同日14時ころには、大破して漂流していたイランの高速襲撃艇ジューシャン(P 225 جوشن カマーン級高速襲撃艇・艇長マレク (ملک) 中佐)は、艦上に生存者がいないと確認され、監視していたSAG チャーリーの砲撃によって、撃沈された。周囲では、死体と、救命いかだに乘ろうとして争うジューシャン乗員を視認したという。ジューシャンの死者は、イラン側の発表では11名であったという (*Danger Zone*, p.211)。

ジューシャンは、これより先の同日正午ごろ、シーリー・オイル・プラットフォーム攻撃に参加したSAG チャーリーのウェインライトから攻撃を受けていた。ジューシャンは、同プラットフォームに接近中で、同艇搭載のハーブーンミサイルを発射できる距離内にあったため、レス少将が決断し、SAG チャーリー指令のチャンドラー (Chandler) 大佐に「その艦を逃がすな、やれ (take)」と命じた。レス少将は、「この日のうち、これがイラン艦を沈める唯一のチャンス」と考えたのだという。これが本音であろう (*Danger Zone*, p.201)。

レスは、「上層部」からいわれたとおり、部下の指令・艦長たちに「できるだけ人道的に振舞え」と指示していた。そのため、正午に、チャンドラーは、まず「警告する。停止して退艦せよ。これより撃沈する。以上」という勧告を行った。(通常、このような命令を受け入れる軍艦はない・清水)

「警告」を受けたジューシャンは、一旦は「敵対の意図はない」との無線連絡を行ったものの、そのまま航路を変更せず、一触即発の情勢となった。4度目の「警告」を受けたのち、12時15分、ジューシャンは、ハーブーンミサイルをウェインライトに対して発射した。ウェインライトはチャフ散布とジャミングで防戦した。チャンドラー大佐の指令でシンプソンが、高速の艦対空 SM-1MR スタンダードミサイルを発射し、双方のミサイルが空中を飛び交った。ジューシャンのミサイルははずれ、シンプソンのミサイルは、相手側のチャフ妨害を抜けて、ジューシャンに命中した。その後、ジューシャンは、ウェインライトからの計4発のミサイルを受け、上部構造物は完全に破壊される惨状を

呈した。

これが、アメリカ側がイラン海軍の艦艇に対して行った最初の攻撃であり、艦載の対空ミサイルが水上艦艇に使用された最初の例となった。イラン側も F-4戦闘機を救援に投入したが、ウェインライトの対空ミサイルを受けて避退した (*Danger Zone*, p.204)。サハンドの撃沈を第2幕とすれば、これが、カマキリ作戦における水上戦闘の第1幕であった。

第3幕目は、サバラーンの登場であった。同日17時、イラン側は、サバラーンを出港させることに決めた。「この情報を受けたアメリカ側の情報将校たちは当惑した (*scratching their heads*)。戦略的には、なんの意味もないからである」(Houghton からの聞き取り *Danger Zone*, p.212)。

この段階では、フリゲートが出港したというだけで、アメリカ側は、これがどの艦であるかは特定していなかった。ジョセフ・ストラウスが、E-6イントルーダーの指揮官エングラ少佐 (Engler) に位置を通報し、同機は、サバラーンに接触を開始した。サバラーンは、陸上からの援護を受けられるよう、沿岸を航行していた。

エングラは、「私は、サバラン (ママ) の写真を膝上板に置いて、ビデオスクリーンに FLIR をアップして、レーダーコンタクトをチェックした。水上を搜索するうち、サバラン (ママ) の艦形にあてはまる艦に遭遇した。我々は「まさしくその艦 (the correct ship) を発見したと確信した。(Kelley は、「A-6 (ママ) は、憎っくきサバラン (hated Sabalan ママ) をバンダル・アッバース (ママ) 沖で発見した」と形容している (*Better Lucky than Good*, p.69)。ふいにその艦から対空砲火を浴びせられた」(同少佐談 *Danger Zone*, p.213)。エングラは一旦高度をとった後、レーザー誘導爆弾を投下、これがサバラーンの煙突を突き抜けて機関部で爆発し、竜骨に達する打撃を与えた。当時サバラーンの前任将校によると、水線下に大きな破口 (複数) が生じたという (サバラーン前任将校・故フアリーボルス・ファーゼル (فريرز فاضل) 少将の証言)。

コロナド艦上で映像をモニターしていたレス少将は「艦は、どっと吐くように煙を噴出したかと思うと、海上で停止した」と語った (*Danger Zone*, p.213,

サバラーンの生涯

No Higher Honor, p.187)。

レス少将は、タンパ(Tampa フロリダ州 マクディール空軍基地内)のCENTCOM (United States Central Command アメリカ中央軍：中東を担当)司令部のクリスト将軍 (General Crist) に衛星回線で報告し、同艦は機関部を破壊され、停止し、大きく油跡をひいていて、(別の) 攻撃隊が、さらに攻撃を加えるところであると伝えた。この報告は、ただちにペンタゴンに伝えられ、クロウ提督 (Admiral Crowe)、カールツチ国防長官 (Secretary of Defense Carlucci) からの攻撃中止命令が出た (*Tanker Wars*, p.171)。

レス少将の回想：「クロウ提督からの返事は『我々は、この日に、もう十分血を流した』というものだった」。そこで、レスは攻撃隊を呼び戻した。イラン側は、タグボートでサバラーンをバンドレ・アッパーズ港へ曳航した。

イラン側の発表では、サバラーンの負傷者は29名。死者はゼロとのことであった (*Danger Zone*, p.213)。これを信じるなら、サバラーンは、実に驚嘆すべき強運艦といえよう。

エンタープライズに帰還したラングストンには、驚くべき知らせが待っていた。彼が攻撃し、撃沈に導いた対象が、サバラーンではなくサハンドであったこと。もうひとつは、彼の任務には、相手の艦を撃沈することまでは含まれていないことであったという (*Danger Zone*, p.214)。一方で「政府高官」は、当初よりサバラーンの撃沈を意図していたことを考えれば、このような命令伝達の齟齬にも奇異の念を抱かずにはいられない。

一方、イランの政権側にとっても、革命防衛隊ほどには忠誠心に信頼を置いていなかった正規海軍が、ここまで戦ったことは、予想外であった (*Iranian Persian Gulf Strategy*, p.4)。

サハンドは、僚艦のサバラーンに代わって「被害担任艦」となったのであった。サハンドが煙を吐いて大傾斜した写真は、「カマキリ作戦」を象徴するものとして有名になった。

サバラーンが助かったことに関しては、イランのヴェラーヤティー (アリー・アクバル・ヴェラーヤティー) 外相は、「アメリカが、このような慈悲を示す

とは、考えてもいなかった」と語ったという (*Iranian Persian Gulf Strategy*, p.3)。

「この長い一日で、アメリカは、イランのフリゲート1隻、高速襲撃艇1隻、ボガマール13型スピードボート3隻を撃沈、2つのオイル・プラットフォーム兼レーダー監視哨を排除し、さらにフリゲート1隻を行動不能にさせた。1944年のレイテ湾での戦闘（日本では「レイテ沖海戦」と総称）以来、一度の戦いで、これほどの損害を出した艦隊 (fleet) はなかった」というのが、宣戦布告なき、この「戦い」についての、アメリカ側の総括である (*No Higher Honor*, p.187)。

国際司法裁判所の判決

イランは、アメリカ軍によるオイル・プラットフォーム攻撃を、1989年5月16日付で国際司法裁判所へ提訴した。これより先、1988年7月3日、アメリカ海軍のミサイル巡洋艦ヴィンセンス (CG 49 *Vincennes*) が、イラン領海内で、バンダレ・アッバース空港から離陸したイランエア-655便のエアバス (乗員・乗客290名) を、イラン空軍のF-14と誤認してSM-2ブロック艦対空ミサイルを発射して撃墜するという事件が起こった。これに対してイランは、1989年5月17日付で、同裁判所へ、アメリカをシカゴ国際航空条約、モンリオール条約等の違反と、それに対する補償とを求めて提訴していた。これに続いて、上記の提訴を起こしたのであった。

提訴の内容は、アメリカによる、民間施設であるイランのオイル・プラットフォームの破壊およびイラン海軍艦艇の撃沈破 (1987年10月19日及び1988年4月18日) が、イラン・アメリカ両国間で1955年に締結された「イラン・アメリカ間の友好・経済関係及び領事条約」の諸条項および国際法の基本的な違反を構成するとして、裁判所が認定する額の保障を要求したものであった (イラン側の提訴1、2)。

これに対して、アメリカは1993年に先決的抗弁を行ったが、1996年12月、国際司法裁判所は、14対2でイラン側の主張を認め、先決的抗弁を却下した (1996年の判決)。これに対して、アメリカが反訴を請求し、裁判所は反訴提起

を許可、裁定は本案手続きへと進んだ。

2003年2月28日、同裁判所は、ふたたび14対2で「アメリカによるオイル・プラットフォーム攻撃を、同国の安全保障上必要な行為とはみなせない。1955年締結の両国有効親善条約違反と損害賠償を求めるイランからの請求は棄却する」という判決を下した。イラン側の請求棄却は、法的条項についての議論の結果であり、実質的には、アメリカ側の主張がことごとく退けられた判決であった。外交的には、イランの勝利といえる。

判決文の中では、1988年4月の事件の発端となった、サムエルB.ロバーツの触雷を、この海域には、イラク・イラン両国が機雷を敷設しており、これをイラン側によるものとしたアメリカ側の主張は、高度に暗示的であるが、決定的ではない（This evidence is highly suggestive, but not conclusive、香西茂は「暗示はしても、決定的な証拠ではない」と訳す。「オイル・プラットフォーム事件」、607ページ）として退け、同国によるオイル・プラットフォーム攻撃を安全保障上必要な行為とはみなせないと、理由づけた。しかも、それ以外のイラン艦による被害については、一切認定していない。結局、アメリカがオイル・プラットフォームを攻撃した根拠と認定したのは、1件の触雷事件のみであり、それもイランによる機雷であったかは確実ではないということになる（2003年の判決文要旨 p.7、「『螻蛄作戦』も、またその一部である OP 攻撃も、本件の状況下では、自衛権の行使として『均衡性』があったといえない」とする。香西、606ページ）。

判決はまた、通商の自由を尊重するという観点から、アメリカによるオイル・プラットフォームに対する攻撃を厳しく批判する（判決文要旨、p.9）。「カマキリ作戦」そのものが、単に石油施設攻撃を究極の目標としていたわけではなく、2隻のフリゲートの破壊を含めて、イラン海軍艦艇と航空機を撃破する目的があったと、事件の背景を鋭く認定している（同、p.7）。

注目すべきは、この裁判の中でアメリカ側から提出された反訴の内容である。アメリカ側は、1955年条約は、この件の対象とならないと主張するとともに、アメリカ海軍による攻撃には、それに至る必然的な経緯があると、縷々説明し

た。その内容が、きわめて興味深い。

1997年6月23日付けのアメリカによる答弁書と反訴 (Counter-memorial and Counter-claim) では、攻撃にいたる経過を述べ、イランによる非人道的な商船、タンカー攻撃があったことを立証しようとする。「イラン軍 (Iranian forces) は、まず尋問するということもしないで、あるいは尋問に応じようとする商船を攻撃したことで知られていた」と、伝聞による情報 (内容はロイター電、ロイズの『週刊事故報告』そのほか) を陳述している (1999年のアメリカによる答弁書・反訴、p.12)。また、商船の損傷の原因として、機雷および陸上・島嶼から発射のミサイルをあげている例が多いのに比べて、水上艦艇による攻撃を具体的に立証している箇所が少ない。

「悪名高い」サバラーンとサハンドについて、その具体的な行動は、ほとんど記述されておらず、「GCBS (The General Council of British Shipping) が、その加入者へのレポートで、イランは今 (1985年) ヘリコプター、ミサイル、それにタンカー戦争中に中立国船を攻撃するのに特に破壊的な役割を演じたアルヴァンドとサバラン (ママ) を含む、妨害手段を使っていると、警告していた」との報告を挿入しているのみである (アメリカの答弁書と反訴、p.58)。

タンカーの被害としてよく名があげられるリベリア船籍のスングリー (1987年10月15日クウェートのアル・アフマディー港にてミサイルの被害にあう、前述)、アメリカ船籍のシー・アイル・シティー (1987年10月16日・同港でミサイルが命中、前述) の事案をとりあげているが、艦艇あるいはオイル・プラットフォーム攻撃を正当化するものにはなっていない (同、pp.37-38)。この事件について、アメリカ側は、2003年の口頭手続きにおいて、「クウェートの軍当局者が、ミサイル (複数) がファウの方向から同港方向へ飛来するのを目撃した」としている (2003年の口頭手続き、p.11)。ところが、答弁書と反訴に添えて提出の地図では、ファウ (1986年にイランがイラクから奪取) および、その北東・イラン側からの発射地点を明確に示すものとなっていて、目撃証言とは異なっている。

判決でも、このミサイル攻撃がイランの責任だったとする証拠は十分でなく、

サバラーンの生涯

米国に対する「武力攻撃」に相当すると認定するのは困難だとされた（香西、605ページ）。

一方、アメリカの答弁書第1章では、イランが攻撃した船舶を7隻あげ、その被害について述べている。それによれば、機雷によるもの3隻、ミサイルによるもの1隻、高速襲撃艇（Gunboat）によるもの2隻、フリゲート・高速襲撃艇によるもの1隻（1988年2月7日・アメリカ所有（Owned）のバラ積み船（bulk carrier）、ダイアナ *Diane*）となっている。攻撃したフリゲートの名は記載されていない（答弁書、pp.165 166、*Tanker Wars* は、ダイアナを攻撃したのは、革命防衛隊であったとしている。*Tanker Wars*, p.172）。

一方、自国によるイラン艦艇攻撃に関しては、ジューシャンについては、1988年4月18日、「イランの誘導ミサイル哨戒艇（ママ）*Joshan*（ママ）が、アメリカ海軍艦艇（複数）に接近し進路変更を拒否した結果撃沈された」と述べるにとどまっている。

サハンドに対しては、「アメリカ軍はイランのフリゲート・サハンドが高速で、U.A.E.の油田の方向へ航行しているのを認めた。サハンドが報復攻撃の任に就いていると考え、指揮官たちは、航空機に調査（investigate）を命じた。アメリカ機が接近するとサハンドは砲火を開いた。機は反撃し、そのイラン・フリゲートを撃沈した」と述べる。

サバラーンについては、「アメリカ機は、イランのフリゲート・サバラン（ママ）を捜索する任務を与えられた。彼らは、1988年4月18日の遅く（later）その任務に就いた。サバラン（ママ）から攻撃されたので、再び、アメリカ機は反撃し、サバラン（ママ）を撃破した」、としている。要するに、イラン側の艦艇を撃沈破したことを簡潔に述べているだけであって（同、pp.89 90）、これら艦艇の「悪行」についての記述も、これらを作戦の目標としたことについても言及していない。もちろん「キャプテン・ナスティー」ことアブドラーフ・マーナヴィー艦長にも触れていないし、彼が国際司法裁判所で責任を問われることもなかった。

2003年の口頭手続きにおいては、アメリカ側のベッタウアー（R. J. Bettauer、

Deputy Legal Adviser) は、「イランがオイル・プラットフォームを『中立国の船舶攻撃』のために使用していたので、アメリカはそれを攻撃目標とした」とし、これに関連して、サバラン (ママ) について触れ、「1987年1月 - 1988年3月にイランのフリゲート (複数) が25隻の中立国の船 (neutral ships) を攻撃した。その結果、これらのフリゲートのうちの1隻が1988年4月18日のアメリカ合衆国の行動のターゲットに含まれた」と簡単に述べる。そしてレス少将の証言を引いて、「アメリカ合衆国の Sassan (ママ)、Sirri (ママ) に対する行動の後、合衆国海軍と中立国の商船がイランの艦艇 (military vessels) から発砲されたので、合衆国艦艇 (The United States ships) は、この事態に反撃し、これらの艦艇のうちの2隻を撃沈し、サバラン (ママ) を戦闘不能にした」としている。「合衆国軍は、サバラン (ママ) に対してはそれ以上の行動はとらなかった。というのは、すでにほかの2隻の艦艇を撃沈していたからだ」と陳述している (2003年の口頭手続き、pp.34, 46, 47)。

それに対する判決は、すでに述べた通りであって、1988年のオイル・プラットフォーム事件の前提としてアメリカがあげたものの中で、サムエル B.ロバーツの触雷しか認定せず、しかも、それにも疑問符をつけているわけである。

その後のサバラーン

1988年4月に損傷を受けたサバラーンは、修復工事を行い、これを機に兵装の一部を更新した。対空ミサイルを Sea Cat からソヴィエト製の ZU-23-2に換装し、レーダーシステムも改めた。1989年には、任務に復帰したが、速力は若干低下したという。魚雷発射管も、ASW3連装を2基新設した。また、1996 - 1998年にかけて、アルヴァンド級は、対艦ミサイルも、中国製の C-802に変更している (*America's Forgotten Tanker War with Iran*, p.32, "Iran's Search for New Big Ships", p.1, *Iran's Evolving Forces*, p.17, *The Naval Institute Guide to Combat Fleets of the World*, p.322)。

現在、サバラーンは艦齢41年。なおも現役として活動している。「カマキリ作戦」で敵役となったアメリカ海軍の多くの艦艇が、スクラップ、標的として

サバラーンの生涯

海没、他国へ譲渡という運命をたどっているのに対して、サバラーンの長命ぶりが目立つ。

イラン海軍は、ソマリア沖の海賊から自国のタンカーを護衛するため、2008年11月から艦艇を派遣するようになった。2010年3月中旬、サバラーンは補給艦ハールグ（ヘリコプター3機搭載の補給艦 431 خارك 満載排水量32492トン、『ジェーン海軍年鑑』、p.270）とともに第7次護衛戦隊として、ソマリア沖へ向かった。本稿脱稿時（2010年10月末）には、サバラーンは、第8護衛戦隊と交代して、本国に戻っている。

サバラーンは、ハールグとともに第3次の戦隊にも加わって、2009年3月末にも任務に就いていた（イラン海軍報道部発表、「ファールス通信8806090751、8906150904」）。現在までにイラン海軍は、400隻のタンカー、商船の航行警備にあたってきたという（“Iran sends warships to Gulf of Aden”, Reuter, Tehran, May 25, اسكورت 400 كشتى و نفتکش توسط ناوهای ایرانی/بولتن）。

終わりに

この時代については、まだ公開されない史料が多く、インターネット上の情報のうち、責任あるものと認定したもので補ったところがある。

本稿は、筆者が生涯で手がける、最初で、おそらく最後の現代史論文である。まだ歴史学の対象とならないほど新しい時代のテーマともいえるが、現段階で明らかにできることをまとめておくのも、意味あることと考えた。データを詳しく書き込んだのは、筆者の他の分野の研究とおなじ主張による。ご叱正をいただければ幸いである。

使用史料一覧

データブック

Alvand Class Frigates: Iranian Frigate Sabalan, Iranian Frigate Sahand, Alvand Class Frigates, Iranian Frigate Alvand, Iranian Frigate Alborz, Books LLC, Memphis, Tennessee, 2010.
Frigates of the Islamic Republic of Iran Navy: Alvand Class Frigates, Moudge Class Frigates, Iranian Frigate Sabalan, Iranian Frigate Sahand, Books LLC, Memphis, Tennessee, 2010.

- Iranian Military: Iranian Frigate Sabalan, Sajjil, List of Senior Officers of the Islamic Revolutionary Guards, Boragh, Project Koussar*, Books LLC, Memphis, Tennessee, 2010.
- Naval Ship Introduction: Ciss Scorpion, Hms Solve, Italian Minelayer Lepanto, Iranian Frigate Sabalan, Archimede Class Submarine*, Books LLC, Memphis, Tennessee, 2010.
- Captain Richard Shape, *Jane's Fighting Ships 1988 89*, London, 1989. (『ジューン海軍年鑑』)
- Eric Wertheim, *The Naval Institute Guide to Combat Fleets of the World*, 15th Edition, The Naval Institute, Annapolis, 2007, p.322.
- “Iranian Warships”, Global Security.org
[/http://www.globalsecurity.org/military/world/iran/ships.htm](http://www.globalsecurity.org/military/world/iran/ships.htm)

一次史料

- Martin S. Navias and E. R. Hooton, *Tanker Wars; The Assault on Merchant Shipping During the Iran-Iraq Crisis, 1980 1988*, London & New York, 1996. (に含まれる関係者の証言および保険会社の報告書、表)
- Bradley Peniston, *No Higher Honor*, Naval Institute Press, Annapolis, 2006. (に含まれる関係者の証言および政府文書)
- Harold Lee Wise, *Inside the Danger Zone; The U.S. Military in the Persian Gulf 1987 1988*, Naval Institute Press, Annapolis, 2007. (に含まれる関係者の証言および政府文書、*Danger Zone* と略記)
- Iran brings a case against the United States, No.89/6, 17 May 1989*, International Court of Justice, The Hague, 1989. (国際司法裁判所への(以下同様)イラン側の提訴1)
- Iran brings a new case against the United States, No.92/26, 2 November 1992*, International Court of Justice, The Hague, 1992. (イラン側の提訴2)
- Case concerning Oil Platforms (Islamic Republic of Iran v. United States of America), Preliminary Objection submitted by the United States of America, 16 December 1993*, International Court of Justice, The Hague, 1993. (アメリカ側の先決的抗弁)
- Case concerning Oil Platforms (Islamic Republic of Iran v. United States of America), Preliminary Objection, Judgment of 12 December 1996*, International Court of Justice, The Hague, 1996. (1996年の判決)
- Case concerning Oil Platforms (Islamic Republic of Iran v. United States of America), Press Release 1998/10*, International Court of Justice, The Hague, 1998. (1998年のプレスリリース)
- Case concerning Oil Platforms (Islamic Republic of Iran v. United States of America), Counter-memorial and Counter-claim submitted by the United States of America, 23 June 1997*, International Court of Justice, The Hague, 1997. (1997年のアメリカによる答弁書と反訴、

サバラーンの生涯

pp.160 - 180の部分が答弁書にあたる)

Verbatim Record: Public sitting held on Monday 24 February 2003, at 3 p.m. at the Peace Palace, President Shi presiding, in the case concerning Oil Platforms (Islamic Republic of Iran v. United States of America), International Court of Justice, The Hague, 2003. (2003年の口頭手続き)

Oil Platforms (ママ) (Islamic Republic of Iran v. United States of America), Decision of the Court, Press Release 2003/38, International Court of Justice, The Hague, 2003. (2003年の判決についてのプレスリリース)

Case concerning Oil Platforms (Islamic Republic of Iran v. United States of America), Judgment of 6 November 2003, International Court of Justice, The Hague, 2003. (2003年の判決文)

Case concerning Oil Platforms (Islamic Republic of Iran v. United States of America), Summary of the Judgment of 6 November 2003, International Court of Justice, The Hague, 2003. (2003年の判決文要旨)

1388/09/08 خاطره بازرسی از کشتی آمریکایی /دریادار دوم عبد الله معنوی/ روزنامه جمهوری اسلامی

http://www.jomhourieslami.com/1388/13880908/13880908_jomhori_islami_10__jebbeh_va_jang.HTML (『共和国新聞』2009年11月29日付け、アブドッラーフ・マーナヴィー元艦長の「証言2」)

روایت فرمانده ناوچه پیکان از دفاع مقدس ملت ایران/معنوی/ دشمن پیش از هر حمایتی موقعیت خود در خلیج فارس را ارزیابی کند/ اطلاعات/4مهرماه/1387

<http://www.military.ir/modules.php?name=News&file=article&sid=221> (『エツテラーアート』2008年9月26日付けより Military IR サイトに転載、アブドッラーフ・マーナヴィー元艦長の「証言1」)

عملکرد نیروی دریایی ارتش در جنگ به روایت دریادار معنوی/ تمام کشورها منطقه مدیون نیروی دریایی ارتش ایران هستند/ خبرگزاری فارس 890761900

<http://www.farsnews.com/newstext.php?=8907061900>

(「ファールス通信89076190」アブドッラーフ・マーナヴィー元艦長の、イラクに対するイランの船団護衛作戦に従事中的「回顧談」)

8806090751 ناو خارک و ناوشکن سیلان عازم خلیج عدن شدند/خبرگزاری فارس شماره

<http://www.farsnews.com/newstext.php?nn=8806090751> (「ファールス通信8806090751」)

8906150904 هشتمین ناگروه اعزامی ارتش به خلیج عدن بازگشت/خبرگزاری فارس شماره

<http://www.farsnews.com/newstext.php?nn=8906150904> (「ファールス通信8906150904」)

1388 اعزام هفتمین ناگروه ارتش به خلیج عدن/نقل از روایت عمومی نیروی دریایی ارتش جمهوری اسلامی/26 اسفند

<http://www.navy.ir/content4359874.html>

“Iran sends warships to Gulf of Aden - navy”, May 25, 2009,

<http://in.reuters.com/article/worldNews/idINIndia-39868320090525>

پیام سیلان . وحدت و همبستگی ملی/اطلاعات 2010/9/25

<http://www.ettelaat.com/new/index.asp?fname=2010/09/09-25/11-34-05.htm&storytit...>

『エツテラーアート』2010年9月25日付け、サバラーン元前任将校・故ファミリーボルズ・ファーゼル少将の証言)

077 عملکرد نیروی ارتش در جنگ به روایت درباردار معنوی/ مجد

<http://www.friend.com/view/post:7758525>

(元艦長アブドラーフ・マーナヴィー少将の「証言3」)

二次史料

永井喜之・木俣滋朗「イラン・フリゲート艦・サバラン」(ママ)『撃沈戦記 Part 』朝日ソノラマ、1991年、269-281ページ (わが国で最初にサバランについて触れた先駆的な著作。込み入った事実関係を手際よく整理して解説している)

香西茂「オイル・プラットフォーム事件」『判例国際法 [第2版]』、東信堂、2006年、604-608ページ (判例研究として裁判の進み方、法律用語を知るのに役に立つ。ただし事件の背景やアメリカ側の本音には、当然ながら触れていない。この傾向は以下の二つの判例研究で、さらに顕著である)

酒井啓巨「判例研究・オイル・プラットフォーム事件 先決的抗弁 ——」『国際法外交雑誌』10巻5号、2001年、745-769ページ (香西氏の上掲論文とともに、イランのオイル・プラットフォームの名を、揃って「ナズル」「サルモン」としている。これは、シーリーの別名ナスル (نصر) とサーサーンの別名サルマーン (سلمان) の誤記である。国際司法裁判所は、これらを Nasr, Salman として、Sassan (ママ)、Sirri (ママ) と併記している)

“Symposium Reflections on the ICJ’s *Oil Platforms* Decision”, *The Yale Journal of International Law*, 29 2, 2004, pp.291-343. (5本の発表が収録されている)

Anthony H. Cordesman and Arleigh A. Burke Clair, *Iran’s Evolving Military Forces*, Center for Strategic and International Studies, Washington, D.C., 2004.

ACIG Team, *Arabian Peninsula & Persian Gulf Data Base: Tanker War*, 1980-1988, 2003, 2004 Updated, http://www.acig.org/artman/publish/article_209.shtml

“The TANKER WAR and the Lessons of Naval Conflict”, *The Lessons of Iran-Iraq War, The Lessons of Modern War*, Vol.II, Chapter XIV-4-XIV9, http://csjs.org/files/media/csis/bubs/9005lessonsiraniraqi_chap4.pdf

Craig L. Symonds, *Decision at Sea: Five Naval Battles that Shaped American History*, Oxford Univ. Press, 2006.

Harold C. Hutchison, “Iran’s Search for new big Ships”, <http://www.strategypage.com/dls/articles2006/20061251423.asp>

Stephen A. Kelly, *Better Lucky than Good: Operation Earnest Will as Gunboat Diplomacy*,

サバラーンの生涯

Naval Postgraduate School, Monterey, California, 2007.

Mike Coppock “America’s Forgotten Tanker War with Iran”, *Sea Classics*, 40 11, 2007, pp. 31 33.

Lee Allen Zatarain, *Tanker War: America’s First Conflict with Iran, 1987 1988*, Philadelphia and Newbury, 2008.

David B. Christ, *Gulf of Conflict: A History of U.S.-Iranian Confrontation at Sea*, Institute for Near East Policy, Washington D.C., 2009.

Do., “Inside the U.S.-Iran War: Petroleum at Risk”, *Spero News*, July, 14, 2009.

Do., “Iranian Persian Gulf Strategy, Operations, and Tactics in the 1980s”, *The Cutting Edge*, pp.1 6, <http://www.thecuttingedgenews.com/index.php?article=11466>

The Office of Naval Intelligence, *Iran’s Naval Forces: From Guerilla Warfare to a Modern Naval Strategy*, Suitland, Maryland, 2009. (文中で、サバラーン、サハンドを「コルベット」と誤記している。pp.1, 7)

“Observing the Hormuz Strait Incident”, *Information - Dissemination*, The Intersection of Maritime Strategy and Strategic Communications, 8 January, 2008. (アメリカ第5艦隊司令長官コスグリフ (Cosgriff) 中將の記者会見、同日ペルシア湾で発生したアメリカ艦船 (CG 73, DDD 70, FFG 61) と IRGCN イラン革命防衛隊哨戒艇との小競り合いについて。それに対する批判の中で、1987、1988年における両国間の軍事衝突を例に挙げて反論するものがあり、特にサバラーンについて言及している)

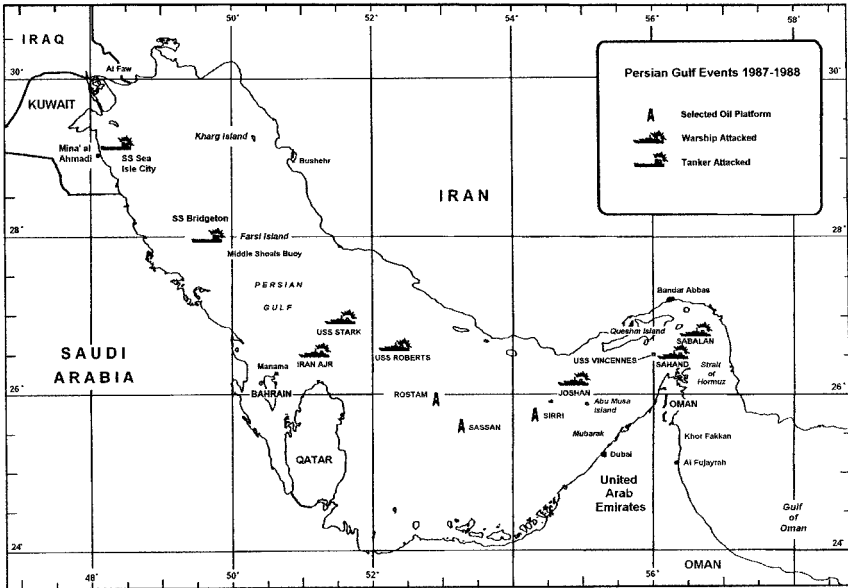
表記について：

サバラーンは、英語の文献では、一様に *Sabalan* と表記されている。英文ではアラビア語、ペルシア語の長母音を表記しない慣習もあり、Baghdad, Kabul と地名を表記する (CNN のアナウンサーは、これをバグダード、カブールと正しく発音する教養がある)。しかし、艦名のサムを *Saam*、ザールは *Zaal* と表記している点から、*Sabalan* は誤表記であると判断し、「(ママ)」を付した。また、オイル・プラットフォームのサーサーン、シーリーを *Sassan*、*Sirri* とするのは、明らかな誤りである。中には、*Sasoon* と誤記するものまである。

謝辞：

国際司法裁判所へ提訴された「オイル・プラットフォーム事件」について、一部の法律用語および関連の研究について、九州大学大学院法学部修士課程の沖祐太郎氏よりご教示を受けたことに感謝いたします。

なお、本論文での要約・翻訳は筆者が行ったものであり、その責は筆者が負うものであることを付記いたします。



Adapted from U.S. Department of State, *International Court of Justice, Case Concerning Oil Platforms* (1993). (Harold Lee Wise)

ペルシア湾の地図と被害艦船、オイル・プラットフォームの位置

アメリカが国際司法裁判所に提出した地図に、Wise が、イラン側の被害艦艇を書き入れて補正したもの。出典：Harold Lee Wise, *Inside the Danger Zone*, Naval Institute Press, Annapolis, Maryland, 2007